

神様の愛の決意

[エゼキエル書 43 章 1～11 節]

それから、彼はわたしを東の方に向いている門に導いた。見よ、イスラエルの神の栄光が、東の方から到来しつつあった。その音は大水のとどろきのようであり、大地はその栄光で輝いた。わたしが見た幻は、このような幻であった。それは彼が町を滅ぼすために来たとき、わたしが見た幻と同じであった。その幻は、わたしがケバル川の河畔で見た幻と同じであった。わたしはひれ伏した。主の栄光は、東の方に向いている門から神殿の中に入った。霊はわたしを引き上げ、内庭に導いた。見よ、主の栄光が神殿を満たしていた。わたしは神殿の中から語りかける声を聞いた。そのとき、かの人かわたしの傍らに立っていた。彼はわたしに言った。「人の子よ、ここはわたしの王座のあるべき場所、わたしの足の裏を置くべき場所である。わたしは、ここで、イスラエルの子らの間にとこしえに住む。二度とイスラエルの家は、民も王たちも、淫行によって、あるいは王たちが死ぬとき、その死体によって、わが聖なる名を汚すことはない。彼らとその敷居をわたしの敷居の脇に据え、彼らの門柱をわたしの門柱の傍らに立てたので、わたしと彼らとの間は、壁一つの隔りとなった。彼らは忌まわしいものを造って、わが聖なる名を汚したので、わたしは怒りをもって彼らを滅ぼした。今、わたしのもとから、淫行と王たちの死体を遠ざけよ。そうすれば、わたしは彼らの間にとこしえに住む。人の子よ、あなたはイスラエルの人にこの神殿を示しなさい。それは彼らが自分の罪を恥じ、神殿のあるべき姿を測るためである。もし彼らが行ってきたすべてのことを恥じたならば、神殿の計画と施設と出入り口、そのすべての計画とすべての掟、計画と律法をすべて彼らに知らせなさい。それを彼らの目の前で書き記し、そのすべての計画と掟に従って施工させなさい。

[1] 神殿崩壊と「新しい神殿の幻」と

今日で旧約聖書のエゼキエル書を共に聞いてゆく最後になります。この書物は全部で48章から成っていますが、40章から最後の48章までは一つの大きなまとまりになっています。読んで頂いた43章には、「主の顕現」という小見出しが新共同訳に付いていますが、全体は40章以下の「新しい神殿の幻」という、神様が預言者エゼキエルに示された幻や主の言葉の一部です。

テーマは「主の神殿」ということです。エゼキエル書と言うと、先週見ました「枯れた骨の復活」とか、不思議な幻の描写が多いので、どこか捉えどころがな

いような印象を持ってしまうのですけれども、エゼキエル書が沢山の章を使って伝えたかった事柄は、「新しい神殿」が与えられるのだということだったのではないかと思います。“新しい”神殿です。それは実際の南ユダ国が滅び、エルサレム神殿が崩落してしまったその中の預言（幻）です。

旧約聖書の民にとって、「神殿」というのは、極めて重要な場所でありました。ある意味私たちにとっての「教会」以上だと言っても良いかもしれません。私たちは、今どこでも神様とお出会いすることが出来ると信じています。今は「聖霊」の時代ですから、特定の場所に限定されません。けれども、旧約の時代においては、「神殿」或いはその前の「幕屋」こそが主と相見える場所であった訳です。主はそこをご自分の地上における住まいとされる、と言っても良いと思います。イスラエルの民にとって、ソロモン王の時代の神殿は誇らしいものでありました。その神殿があるからこそ、自分たちの信仰は守られている、神様はそこから恵みを下さるのだと思い、熱心に神殿詣でもしていたのです。しかし、今ユダの国は滅び、神殿も破壊されてしまったような状況です。彼らは“拠り所”を失ってしまったのです。多くの者たちは絶望してしまいました。この絶望は深いものです。「自分たちは神様に捨てられたのではないか。最早その愛の対象ではないのではないか」と、生きる術を見失い、嘆くしかなかった中であつたと思います。

[2] わたしはあなたと共に住む—裁きを超えた愛

「歴史」というのは、それをどう捉えるかということによって意味合いが変わってくるものだと思います。自分たちの見たくない歴史の事柄には蓋をしてしまうのか。でもそうであれば自分自身は変わりませんよね。そうではなくて、確かに起こった出来事を直視してゆく中で「これは今の私たちにとって、私にとって、どんな意味があるのだろうか」と問うて行くなれば、それは自分を変え、将来へとつながってゆくことになるのだらうと思います。

エゼキエルが見た幻も、試練の只中であつて、前を向かせてくれる幻であり、言葉であつたと思います。一面これは神様の裁きでありました。43章の中にもそれを暗示している言葉が出てまいります。1節以下にこうあります。—「それから、彼はわたしを東の方に向いている門に導いた。見よ、イスラエルの神の栄光が、東の方から到来しつつあつた。その音は大水のとどろきのようであり、大地はその栄光で輝いた。わたしが見た幻は、このような幻であつた。それは彼が町を滅ぼすために来たとき、わたしが見た幻と同じであつた。その幻は、わたしがケバル川の河畔で見た幻と同じであつた。わたしはひれ伏した。主の栄光は、東の方に向いている門から神殿の中に入った」。新しい神殿の幻の中の言葉です。新しい神殿は、その東門

から神様の栄光が戻って来るのだと言うのです。御使いがその光景をエゼキエルに示します。しかし、これは以前同じケバル川のほとりで見たのは、み使いは「町を滅ぼすために来た」時だったと言うのです。イスラエルの、真の神を捨てた罪、不信仰がこの背後にあることを見せられます。歴史の厳しい側面です。けれども、このケバル川のほとりにおいて再び彼は見ました。「**主の栄光は、東の方に向いている門から神殿の中に入った**」。太陽が東から昇るごとくです。

そしてこう続きます。—「わたしは神殿の中から語りかける声を聞いた。そのとき、かの人¹がわたしの傍らに立っていた。彼はわたしに言った。「人の子よ、ここはわたしの王座のあるべき場所、わたしの足の裏を置くべき場所である。わたしは、ここで、イスラエルの子らの間にとこしえに住む。」—主なる神様の宣言です“神、共にある”ということですね。その後²に書いてありますことは、それまでの、既に墓に眠っているイスラエルの王たちの時代の罪を受け止め、神様の憐みに相応しく生きなさい、悔い改めの中で、新しく神様を信頼して行きなさい、ということだと思えます。これは、凄いことではないでしょうか。**裁きを超えた「愛」**です。「わたしはここ(新しい神殿)であなたととこしえに住む」と言われています。こちらが願っていたのではなくて、人間が一度捨ててしまった**神様ご自身が、わたしはとこしえにあなたの神となると言われている**のです。ここには赦しがありますね。「わたしはあなたと共に住む、共に生きる」。新しい歴史の始まりです。

[3] 後から振り返って分かることも

私は最近、ある身近な若いクリスチャンの人からこのような話を聞いて、本当にそうだなあと思ったことがりました。彼(30才位)は、ワクチン接種を受けたのですが、思いのほか副反応が酷く現れ、かなりの倦怠感でとても電車に乗って会社に行くことが出来ず、休みを貰ったということです。その時、自分は静かに寝ていただけなのですが、同居している**家族の者**が、何かと心配をしてくれる。さり気ないことなんだけれども、それがとても有難く、心に染みたと言うのですね。コロナというのは結構孤独とか精神的なことが大きいことのように思った、と彼は言い、そこで**イエス様**のことを思ったというのです。イエス様は初めから「**インマヌエル**」と呼ばれていると。それは「**神、我らと共に**」という意味ですね。**共にいて下さる**ってそれだけでどんなに凄いことかと思った、神様なら「力強い方」「全能なるお方」とすぐ思うけれども、でも全能であつても一緒にいて下さらなかつたら、自分とは無関係かもしれないなと思った、と言っていました。

エゼキエルが聴いた言葉—「わたしは、ここで、イスラエルの子らの間にとこしえに住む」。ここには、私たちがどんなに弱い者であろうが、いや、弱いからこそ、わ

わたしはあなたと共に住むよ、とこしえに、という、**神様の愛のご決意**が、この新しい神殿の幻にはあると思いました。このエゼキエル書は48章で終わるのですが、このエゼキエル書の最後の言葉もいい言葉だなあと思いました。48章15節です。「**都の周囲は一万八千アンマである。この都の名は、その日から、「主がそこにおられる」と呼ばれる**」。

神様が「共におられる」のだ、これは、今も**神様の言葉のお約束**です。神様のお約束とは空しくなることはありません。辛い環境の中でそれを信じることはもしかしたら難しいかことかも知れないと思います。イスラエルの民もそうだったのです。けれども、あとから振り返って分かることもあると思います。

私は今日の箇所から有名な「**あしあと**」という、元は英語の詩を思い出しました。「Footprints」という詩です。その詩を読ませて頂き、お祈りをしたいと思います。

ある夜、わたしは夢を見た。 神様と一緒に浜辺を歩いている夢だった。

空にわたしの今までの人生の一コマ一コマが映し出され、そこには二つの足跡が並んでついていた。

ひとつはわたしの足跡、もうひとつは神様の足跡だった。

これまでの人生の最後の光景が映し出されたとき、わたしは、砂の上の足跡に目を留めた。そこには足跡がひとつしかなかった。

それは人生でいちばんつらく、悲しみのどん底にあったときだった。

わたしは驚いて神様に尋ねた。

「主よ。わたしがあなたに従っていきます、と申し上げたとき、あなたは、すべての道において、わたしとともに歩むとお約束くださいました。それなのに、わたしの人生のいちばんつらかったとき、足跡が一つしかないのです。わたしがあなたをいちばん必要としていたときに、どうしてあなたはわたしから遠く離れておられたのですか。」

主はこたえて言われた。

「わたしの大切な子よ。わたしは、あなたを愛している。あなたを決して捨てたりしない。

苦難の中にあつたとき、試みのとき、そう、あなたが砂浜に足跡をひとつしか見出さなかったそのとき、わたしはあなたを背負っていたのだ。」

お祈りを致します。